

謝金、謝礼 ～後輩から学ぶこと～

1. 教育を考える一言

「4分の1しか出席していないのに、なぜちゃんと払わないといけないのか。」

2. 背景

お稽古の先生と1年生が、破門寸前の大喧嘩をしたらしい——そんな恐ろしい話を部長から聞いたのは、2011年も暮の師走でした。これは日本教育界にとって、話題にしづらい、お金絡みの問題です。私の所属は邦楽部。箏生田流を嗜んでいます。「先生にご指導頂いた学生は、月末にお月謝3000円を払う」これが、約20年にわたり部に息づく伝統でした。その代替案として、出席した回数に対し、時給で払う金額交渉に出たのです。問題の1年生は、12月欠席が多く、4分の1しか出ていません。ただ今年は特別、先生側の都合で稽古の回数の減る月があったり、学生の人数が増えたために一回の指導時間が比例して短くなったりした事もあります。争点は、稽古時間が今までよりも確保されていないということにあります。

3. 考察

師弟関係は、習い事、塾ひいては学校教育とも共通するところがあります。これに対立する問題が、1年生がきつと感じたのであろう、「高く割に合わない」という気持ちです。給金、給料、授業料ではなく「謝」という文字が、何故あえて用いられているのでしょうか。

「先生の貴重なお時間をいただいて教わっている」という気持ちが込められていると私は考えています。宮澤（2010）によれば、1930年代イギリスでは、副業として教師を務めることが普通であった、とあります。右絵は、産業革命後のイギリスの教師、ジョン・パウンズのレッスン場面を描いたものです。ここに何か違和感を、今の学校の教師・生徒関係との間に抱きました。



靴作りの仕事をしながら子どもの方を振り返り、読み方を教える職人「John Pounds」(Seaborne, M. 『Education: A Visual History of Modern Britain series』、1966年)

私が以前教わっていた箏の師匠は、川崎で夫の町工場を手伝う専業主婦でした。工場働く人たちに食事を振る舞うなど、めまぐるしく働きながらも、夜や休日の少しの合間を縫って、東京へ自己研鑽に行き、門下にも指導をしていました。そのパワフルさに、いつも驚嘆しながら、ご指導いただけるという厚意に対し自然と感謝をもてたなあ、と思うのです。

しかし、そんな私にも1年生が言わんとしていることによく共感できます。この気持ち、消費社会の文脈によくあてはまると思われまます。消費社会に生きる我々は、サービスをも金額で品定めし、満足できない場合、文句を言い改善を要求します。そして身銭を切る行為にシビアになってきている…しかし教育は目に見える成長や充実感を時間単位で実感できるとは言いがたいものです。さて、生産者は消費者である大人子どもにどのように振舞っていけばよいのでしょうか。消費者は生産者の努力も苦勞も顧みない。将来教育で食っていけない時代が到来するかもしれません。どげんかせんと！ぜひ副業も考えておきましょう。

参考文献

宮澤康人「西洋の教育文化における音声言語と書記言語の葛藤：教育史認識の「メディア的転回」によせて」、辻本雅史編『知の伝達メディアの歴史研究：教育史像の再構築』思文閣出版、pp.28-30、2010年